坪内逍遙「国文学の将来（演説の体に倣ふ）」論

――その「国民文学」論の位相――

岡本絵里
竹村信治

1　はじめに

内村鑑三は明治二八年（一八九五）七月に「何故に大文学は出ざる乎」を、同年一〇月に「如何にして大文学を得ん乎」を『国民之友』に寄せている。これらは、同年六月九日刊『国民新聞』の次の記事に応じたものという。[注1]

以太利復活の大風雲はダンテを産せり、アリオストを産せり、タッスを産せり。日本大膨張の下、一の大文豪を産するなき耶。

（句読点、引用者）

「日本大膨張」とは日清戦捷による世界への躍進をいう。各雑誌メディアは、明治二八年の年初からこの種の議論、すなわち戦捷をもって世界にその存在を主張しえた日本の戦後文学はいかにあるべきかといった議論を、「国民文学」希求の声として多く掲載した。

○高山樗牛「序詞」（『帝国文学』創刊号、明治二八年一月）
○井上哲次郎「日本文学の過去及び将来」（『帝国文学』、明治二八年一～三月）
○鄭州生（島村抱月）「戦争後の国文学」（『早稲田文学』、明治二八年一月）
○西蹊生（金子筑水）「国民文学と世界文学」（『早稲田文学』、明治二八年一月）

『国民新聞』記事、内村鑑三論文は、こうした「日本大膨張」下に行われた明治二八年の「国民文学」論の一環として、[注2]さらには、日露戦争をもはさむ十数年間に展開された「明治後期国民文学運動」[注3]の始まりの風景を伝えるものとしてある。この時、坪内逍遙もまた『太陽』創刊にあたって「戦争と文学」（明治二八年一月～二月）を寄稿し、『國學院雑誌』第七～九に「国文学の将来（演説の体に倣ふ）」（明治二八年五～七月）を連載して、この議論に参加している。本稿では、主として後者を取り上げ、逍遙明治二八年の「国民文学」論について、その位相を窺うこととしたい。

2　〝演説の体に倣ふ〟「国民文学」論

逍遙「国文学の将来」は題に「（演説の体に倣ふ）」の記載をもつ。三回にわたる連載の各冒頭末尾が、

・第一篇冒頭「読者諸君、こゝに一君子ありとせんに、其の君子たるの実は、如何にして知るを得べきか。」
末尾「真の良好の傑作を取りて、之れを彼れに示さゞるべからず。諸君ハ何物をとりて右の三美文体（引用者注、「抒情の美文」「叙事の美文」「劇の美文」）の極致なりといはんとするぞ。」

・第二篇冒頭「再び問ふ、吾人は如何なる作を取りて（…中略…）広く万国に公示すべきぞ。」
末尾「いでや、此の思想の潮流、是れを我が現在の思潮明治の思潮に比せば如何。」

・第三篇冒頭「泰西今日の思想ハ、平等兼差別の、矛盾的潮流に漂ひつゝあるなり。（…中略…）明治の新思潮に比せば如何。」
末尾「予は深く国文学者の任務の、将来の国文壇に対して、重且大なるを感ずるなり、我が日出帝国をして真に世界に知られしむるは、彼等が将来の奮励によること、蓋し頗る大なるべしと信ず。こゝに国文学者といふは、もとより古学者国学者のみを指せるにあらず。広く現在の文学家を総べていふなり。行文蕪雑、措辞散漫、恐らくは事理詳具せずして、微衷徹底せざらんことを。読者若し言の訐なるを咎めずして、其の直なるを取られなば、何の幸か之れにしかん。[注4]」

などとあるのによれば、これは「演説」口演の体の模倣を注記したものとすることができる。しかし、「国文学の将来」に先行する諸論と比較すれば、それは時局、「文学」をめぐる当代のディスクールの模倣をも含意しているようだ。末尾にいう「言の訐なるを咎めずして」もこれにかかわっているように見える。

たとえば第一篇冒頭。逍遙は、『論語』為政第二の「子曰、視其所以、観其所由、察其所安、人焉廋哉、人焉廋哉」を踏まえて、日本を「所以」「所由」「所安」の美を備えた「君子国」と称えた上で、

然り吾人ハよく此の君子国を知る、其の所為の常に美なるを信ず。さハれ碁布星羅の外邦、彼等ハいまだ之れを察せず。まして知ることをや、信ずることをや。

と嘆く。そして、日清戦捷は彼等を刮目せしめたが、それは「只其の以す所の雄なりしを視るのみ。いまだ其の所由の美なるを見ず、又其の所安の美を察する能はず」として、

故意の誤解は今論ぜず、若し彼等の誤解にして全く知らざるに基くとせば、力めて其の無知の惑を攘ひ、此の君子国の実を示すハ、吾人が至当の務ならずや。

と述べる。これは、たとえば、明治二六年の外務大臣陸奥宗光帝国議会演説の中の一節、

条約改正の目的を達せんとするには、畢竟我国の開化が真に亜細亜洲中の特別なる文明、強力の国であると云ふ実証を外国に知らしむるに在り。[注5]

といった論調に倣うものだろう。

また、逍遙は、第一篇末段で、その「此の君子国の実を示す」に

ついて、「文学を示すにあらずば、日本を知らしむるの道無きなり」として次のように語りかける。

只問ふ、吾人は如何なる作を取りて、之れを現日本の文学なりとし現日本の影なりとし広く万国に公示すべきぞ。然り、孤弱なる鶏林を擁護し、暴謾なる大清を膺懲し、義名を全世界に轟かし、更に進んで西欧の文明と相馳騁し、東洋の君子国をして天上天下千古不動の大君子国たらしめんとする現日本、此の大日本の国粋を発揮し、兼ぬて其の大理想を表示するものとして、如何なる作をか海外列国に示さんとする。

同様の文言は第二篇冒頭、第三篇末段にも見える。これは明治二八年一月『太陽』発刊の辞（「太陽の発刊」）の、次のような時局認識、「日本大膨張」下の昂揚した口吻に応じたものだろう。

今や外には征清群の嚮ふところに大捷を奏するあり。内には浩然たる正気の磅礴するところ禁ぜんと欲して能はざるあり。以て三千年来蘊蓄せられたる我帝国の実力は煥乎として発揚し、世界の耳目を聳動し来りて、宇内の一代強国を生じたるの感、中外至る所に反響せんとす。愉絶快絶。今後の同胞四千余万は復た深窓に眠るの日本人に非ずして、五大洲中に闊歩するの大日本人と為れり。豈我邦第二の維新を為す時ならずと謂はんや。此時に当りて大に知識を世界に求め、我邦文明の真相を発揮して之を宇内に宏にせんこと、蓋し国民の任務たり。生等は此に全力を『太陽』に尽くし、一方には知識を万国に求むるの途を開き、一方には国交を世界に輝かすの端を開き、敢て第二維新の大業を賛助し、以て聊か至渥甚深なる　皇恩の版位置に酬い、併せて同胞諸君の眷顧に答へんとす。

こうした国家的自我（亀井俊介、「国際社会におけるエゴイズム」「エゴティズム」）[注6]に触れる声は内田魯庵「戦後の文学（国民をして機運に乗ぜしめよ）」（『国民之友』、明治二八年四月）にも聞かれることであって、内田はそこで「戦争は勝てり。東亜の半開国は一躍して一等国の斑に入る。是に於て文芸技術は本より社会百般の人事総て一等国たらざるべからず」として、「文明国」としての戦後の「文学」について展望している。これに先立つ井上哲次郎「日本文学の過去及将来」（明治二八年一月）の次の一節もまた、その一斑であろう。

文学は国民の花なり、即ち国民精神の煥発して光彩を成すものなり、如何なる文明国も、若し吾人が果して文明国と称し得べきものならば、燦然たる一種の文学を有せざるなし、若し此の如き文学を有せざらんか、仮令ひ如何ほど他国を侵略するの伎倆あるも、未だ以て文明国と称するに足らず、（…中略）戦争の国民一般に影響を及ぼすの甚だしき、衆皆之れに耳目を傾注し、殆んど国民の業務は全く戦争にありとするが如き観なきにあらず、然れども又文学が如何に国民の栄光を発揚し得るものなるかを思へ、無数の敵を斬殺して血を流し骨を摧くの外更に辞藻を千載に伝ふるの偉業あるを忘るゝ勿れ。

こうして、逍遙「国文学の将来」は時代の言論を模倣し、その模倣を標題に表示する。となれば、ここには擬態をもってする戯態が仕組まれているはずで、したがってその「国民文学」論は、むしろ「（演説の体に倣ふ）」論調を差し引いて読まれなければならない。

3　逍遙の「戦後文学」論

もちろん、こうした言論と逍遙「国文学の将来」との符合に、時代のナショナリズム言説に同調する逍遙をうかがうことも可能である。しかし、同様に「日本大膨張」下の明治二八年に「文学」を言挙げする両者は、その「文学」の内実を異にしている。たとえば、逍遙が「国文学の将来」第三篇を寄せた『國學院雑誌』第九の時論欄には、「戦後文学」を展望する次のような声が紹介されている。

『成田志林』第八号に見えたり、先づ文学者の目的は宇宙の美、天地の妙、人情の極微、世態の蘊秘を探るのみにはあらでなほ一般の社会に対する責任をも有するものなりとて、幾多の士民が日夜労働苦役するに対し文学はよし精神的事業なりとするも悠々として自適すべからざる事をいひ（…中略…）此の際国家に取りて最も必要なるは国民精神の強固なり、宗教、教育、文学等精神界を支配するもの、うち特に文学は範囲尤も広くして、影響大なるが故に文学者は大に注意すべき筈なり、然るを現今の文学界多くは野卑に流れ小説、詩歌、論文、随筆等概ね卑猥浮華一読嘔吐を催すもののみなれば到底国民精神を鼓舞するに足らず云々斯くて更に戦捷後は一般の人民兎角に懶惰放逸に失し易き者なれば大に警醒する必要あるが故に今後の文学は人情的、理想的、厭世的、悲哀的、怯懦的なるよりもむしろ軍事的、現実的、楽天的、歓喜的、豪壮的ならざる可からざる由を説き、要するに一般国民をして敵愾公憤の心を養成助長せしむる是れ当今文学者の社会に対する最大任務なりといへり。

ここには、「日本大膨張」下の国家的自我（ナショナリズム）が求めた「国民文学」像が具体的に示されている。「宇宙の美、天地の妙、人情の極微、世態の蘊秘」ではなく「国民精神の強固」を「文学」の目的とし、その内容にも「人情的、理想的、厭世的、悲哀的、怯懦的」ならぬ「軍事的、現実的、楽天的、歓喜的、豪壮的」側面をこそ求める声。こうした声は日清戦捷の後には諸処に聞かれるものとなった。国学者である落合直文は「戦争と国文学と」（『國學院雑誌』第一号、明治二七年一一月）において「歌よまぬものすら、支那征伐の大挙をうたはむとする今日にあたり、歌よむものが、軍歌のひとつだもよまざるなど、そもそもいかなる心ぞや。」と語る。[注7] また、井上哲次郎も、先の「日本文学の過去及将来」において、「如何に軍人が戦争に勲功を成すとも、文学の之れを伝ふるなければ、其光誉を顕はすこと能はず、文学其れ自身も亦世人の是認を竢たざれば、遂に湮滅して無聞に帰するの外なかるべし。」と述べている。いずれも『成田志林』第八号にいう「当今文学者の社会に対する最大任務」「一般の社会に対する責任」の声と共鳴するものである。はたしてこうした言論に呼応した詩歌や小説、演劇は多く生まれた。[注8] なかでも井上哲次郎が序文を寄せた与謝野鉄幹の詩歌集『東西南北』（明治二九年七月）に収められた詩歌はその代表的なものとして注目されている。そこに語られているのは「国事に奔走する〈男〉たちの世界」だった。[注9] 国家的自我の確立に培う、いわゆる〈男性性〉を纏った「文学」が必要とされ、また歓迎されたわけである。

だが、逍遙はこれらに「文学」としての価値を認めない。「明治二

十七年文学界の風潮」（『早稲田文学』、明治二八年一月）では、「韓国事件及び日清事件に催されて現れし」「新体歌」を「恍惚春に酔うて桜花を詠ずるものと一般、いまだ肺腑より感慨して至誠を歌ふには至らざりし如し」と断じ、「征清事件の為に現れし無数の戦争実記、又普通の戦争物語の如き」も「一層純正文壇をさびれしめしもの」、「此の間現れし戦争に関する小説類の如きは、美術品としては、殆ど取るに足らざればなり」と難じている。(注10) 同様の批判は『太陽』明治二八年一・二月号に掲載された「戦争と文学」でも行われ、そこで逍遙は、戦争について「醇文学に不利なりと断言するを躊躇せず」と語り、しかも「社会」への「直接影響」が「国民已に其の想像を差別の時と所とに限り、平等の夢幻界に遊ばしむるを得ず」といった事態の招来に及ぶとして、警鐘を鳴らしているのである。

ここにいう「差別の時と所」に局限される「想像」とは『成田志林』第八号にいう「文学」に「鼓舞」された「国民精神」、すなわちナショナリズムのことである。一方、逍遙が「文学」に求めるのは「国民」を「平等の夢幻界に遊ばしむる」「想像」、すなわち『成田志林』第八号が否定する「宇宙の美、天地の妙、人情の極微、世態の蘊秘」「人情的、理想的」、つまり普遍主義的な志向である。普遍主義につく逍遙は、同じ「戦争と文学」のなかで、「戦争」の肯定的側面としての「間接影響」を次のように述べてもいる。

・戦争といふ一大事に遭遇せる国民は、或は驚き、或は怒り、或は喜び、或は憂ひ、或は慨し、或は恐れ、栄辱禍福のさながら其の頭上にふりかゝれるに会して、七情発露、殆ど之れを抑止する能はず、其の美なるもの、其の醜なるもの、其の高きもの、其の卑きもの、挙げてありのまゝに露呈せられん。最も多感なる詩文人の、みづからもまた此の情熱者の一人となり、親しく此の激昂せる熱情を観察するや、其の得る所豈尠しとすべけんや。所謂国粋の骨髄、否、人情の精英、否、人性の奥秘、平時に窺ふこと能はざるもの、この時豈知りがたからんや。

・凡庸の小詩人こそ、目前の戦争には目前の利害のみを観、過去の大屠戮には漠たる殺伐の観念のみを得れ、感慨高潔なる大詩人に至りては、古今の特殊なる闘争によりて、人間遍通の大妙相を学び、差別の人物を観察して、不易平等の性情を瞑悟す。蓋し地の東西を問はず、時の古今を論ぜず、大戦乱は毎に大人物を呼び起こす、驚天動地の事業は、概して大擾乱と同時に成る。文学の好材料は世間毎にこれありと雖も、其の最も著大なるものは、戦乱の当時にこそ顕然たれ。

さて、このように見てくると、「日本大膨張」下の戦後文学論の舞台に上りながらも、逍遙がそこで声高に叫ばれた「国民精神」、実演された「国民文学」とは異なる「文学」を思い描いていたことは明らかである。「（演説の体に倣ふ）」論調を差し引いて読まれなければならないとしたのはこれによる。それは、いわば時代の言論への参与を装いながらそこに自説を織り込む所作としてある。したがって我々は、その織り込まれた糸をこそ端緒として「其の直なる」を取り、逍遙「国民文学」論の位相を窺うことになる。

4　逍遙「国民文学」論の位相

しかし、これはそれほど難しいことではない。見たように、第一篇末段の逍遙は、「此の君子国の実を示す」について、「文学を示すにあらずば、日本を知らしむるの道無きなり。」と述べる。「文学」にこれが託されるのは「文学は一国粋の影」だからだが、そればかりではなく、「文学」とりわけ「美文学」（抒情・叙事・劇）の「真の情致の美」が「普遍平等」であって「殊に外国人の心に入り易きもの」だからである。「造化の幽玄を歌ひ、人情の微妙を詠ずるの作は、千古相通、東西無差別なり。苟も情あらん者は、皆読みて解するを得べく、解して同情を寄するを得べし。老幼男女、賢愚暁昧、学不学を問はざるなり」。このことは、維新後の日本で「英国美文家の名（又ハ独、仏、魯等の美文家の名）の、しばしば読書界に伝へらるゝ」事実がよく証し、それは、「外国粋の我が国に入れるの証也、隠約の間、外国粋が我々同胞を薫化しつゝあるの証」である。「人と国とを問はず、其の所由と所安とは、此れに由らずんば知るに由なし」。もって、「君子国」日本の所由・所安の美も「（美）文学」をもって世界に開示されるのがふさわしい、という。

ここにいう「国粋」は志賀重昂が『日本人』第二号（明治二一年四月）以降に主張したいわゆる〝国粋保存主義〟の「国粋」ではなく、「普遍平等」を具えた「国粋」（『思想、意欲、情感』「風俗、人情、理想等」）である。「国文学」の「天職」は、「当の国粋の影」でありながら「当の国粋の美を天下に発揮する」にある。そして、「欧米列国の諸文学ハ頗るよくその天職を尽くし得たるもの」となっている。では、「吾人は如何なる作を取りて、之れを現日本の文学なりとし現日本の影なりとし広く万国に公示すべきぞ。」――「国文学の将来」が問われるのはこの文脈においてのことだが、逍遙の「国民文学」はそうした「普遍平等」の「国粋」を具備したものとして構想されているのである。

こうした構想はすでに明治二八年一月の「戦争と文学」で開示されていたことでもあった。逍遙は「真正の国民的文学」について次のように規定している。

> 彼等は厳として其の自国の文学たると同時に、普く全世界の文学たり。彼等は一面より観れば、一国粋の凝りなせる処にして、他の面より観れば、自然及び人間の美妙の会なり、すなはち全天下の美術たり。かくの如き文学、之れを真正の国民的文学といふ。

一国特殊の文学である「国文学」が「自然及び人間の会」、つまり普遍性を具えた「全世界の文学」「全天下の美術」でもある境位。逍遙は、そうした「平等の夢幻界」の「文学」にこそあるべき「国民文学」の姿を求めているのである。

ところで、ここに見た逍遙流の「国民文学」論は、同じ明治二八年一月の金子筑水「国民文学と世界文学」（『早稲田文学』）のうちにも見出せる。「されば真正の国民文学を養成するは、真に世界文学を養成し、以て大文学を成ずる所以なり」。早稲田学派の「国民文学」論とでも名付けたくなる重なり方だが、しかし、同様の発話は北村透谷「国民と思想」（『評論』明治二六年七月）にもすでに窺える。そこ

で説かれる「地平線的思想」は逍遙のいう「自国の文学」、「純美を尋ね、純理を探る」との「高踏的思想」は「普遍平等」の「全世界の文学」。そして透谷は、「詩人は一国民の私有にあらず、人類全体の宝匣なり。」という。

こうして逍遙の国民文学論は透谷のそれを引き継ぐもののごとくである。けれども、透谷のそれが「詩人豈に国民の為にのみ産れんや、詩人豈に所謂国民的なる狭少なる偏見の中にのみ限られんや、然れども事実に於て、詩人も亦た愛国家なり、詩人も亦た国民の中に生くるものなり。」としてロマン主義的ナショナリズムに回収されていくのに対して、逍遙はこれとは異なる論脈を構成していく。

亀井俊介氏はいう。(注11)

私は、明治精神の中枢は、西洋文明のすぐれた部分と日本のナショナリティとの中間に立って、前者を学びながら後者を拡充し、日本人の文化の存在と意義を世界にむかって主張しうるものにしようとした人々にあったと思う。

透谷や逍遙、また本稿で取り上げる人々は、すべてこの「明治精神の中枢」を生きた人々である。しかも「彼らはほとんど例外なく、外の世界と内の世界との間で揺らがなければならなかった」。そして、明治の初期から中期にかけて活躍した知識人たちは、みな強い国家意識をもっていた。彼らの精神活動においては、たとえば自我の意識も、美意識も、すぐさま国家意識と結びついた。一個の人間としての自我の確立の主張すら、国民的個性の発揮を求める思いと合体した形で説かれた。

これは先に見た国家的自我の論説、「詩人も亦た愛国家なり」と説く透谷に重なる。しかし、「日本大膨張」の舞台に擬態をもって上り、戯態のうちに「世界文学」たりうる「国民文学」の必要を語る逍遙は、すなわち、「明治精神の中枢」を生きつつ選び取った自らの「文学」を戯態のうちにテキストに織り込む逍遙は、そうした呪縛から身をかわすようにして「国文学の将来」第二篇を次のように紡ぎ出す。

冒頭、逍遙は「大日本の国粋を発揮し、兼ねて其の大理想を表示する」「国文学」の如何を問う前提として、「我が国俗の現時の状態」「精神的状態」を「欧米現在の思潮」との比較をもって点検すると宣言する。結論はこうである。

畢竟ずるに、泰西今日の思想は、平等兼差別の矛盾的潮流に漂ひつゝあるなり。曩には悪差別を打破して平等に開き、更にまた差別に戻り来たり、此の新差別と平等との間に、円満の調和を試みつつあるなり、何となれば、平等真に尊ぶべく、差別また尊ぶべく、決して偏棄する能はざればなり。是れを欧米現在の思潮なりとす。且つ吾人が常に毎に彼なたの文学的作物の上に陰顯しつゝあるを認むる所なり。

そして、比較結果は第三篇冒頭で次のように述べられる。

之を要するに、我が現在の思潮は、已に明に泰西十九世紀の潮流に合せり。彼なたの思想海の千波万波は、こゝにも浩蕩として起伏するなり。(…中略…) 明言すれば、今の泰西の思潮と我が明治の思潮とは、概括して大体の上よりいへば、その内包も、其の方向も、また其の性質をも一にせるなり。

かかる結論にいたる間の西欧近代思潮史概観、明治思潮史概観の在

り方はそれとして検討に値するが今は措く。重要なのは、「泰西の思潮と我が明治の思潮」がひとしく「平等兼差別の矛盾的潮流」のうちにあるとすることで聴衆たる読者の歓心を買いつつ、他方、「海外列国」に示す「国文学」を「平等兼差別」の論理をもって構想することの必然をも構成しようとしている点だろう。ここにいう「平等」は啓蒙主義の開いた普遍主義のこと。また、「（新）差別」とはドイツ・ロマン主義に端を発する国民・国家主義的ナショナリズムのことである。逍遙は、「明治精神の中枢」を担う「知識人」がドイツ流の「（新）差別」に依然として傾くなか、「泰西今日の思想」が「平等兼差別」の潮流にあることを強調することで「平等」（＝普遍）の復権を図る。そしてここに、「美文学」（抒情・叙事・劇）の「真の情致の美」を具えた「国文学」、「世界文学」性（＝「普遍」）に裏打ちされた「国民文学」（＝「差別」）の正当（統）性を担保しようとするのである。逍遙「国民文学」論の位相はここにある。

5　逍遙「文学」論と「国民文学」論

かくして逍遙の「国民文学」は、「泰西の思潮と我が明治の思潮」の合流点で、「自国の文学たると同時に、普く全世界の文学」たる「普遍平等」の「美文学」として構想されることになる。しかし、第三篇の逍遙は、その相同的な「泰西の思潮」と「我が明治の思潮」との間にある「歴然たる差違」を指摘する。「差違」は「度と量」の上にある。「度」とは「商工業の進歩」や「学問芸術」の発達等をいう。これは未だ西欧に劣るとするほかない。けれども「量」においては現在日本の優位は動かない。これが逍遙の主張である。

ここで問題にされている「量」の差とは、日本の思潮を構成している「要素の分量の多寡」のこと。日本の「今日の思潮」は「東洋固有の諸要素」「日本廿六世紀的思潮」と「泰西十九世紀の思想」の二大思想の融合体である。両者をともに所有している例はほかにない。「泰西」は、日本の開国以来「東洋の史」を「おぼろげに探ぐり得たるも、いまだ知悉せざる」状況にある。一方、日本は自国は勿論、「東洋特殊の哲学、若しは東洋特殊の美術、若しは東洋の特殊の文学、制度や、習慣や、遊戯や、技術」などを熟知している。しかも維新以後は、西洋の思想や文学も十分に摂取した。「我が明治の思潮」は、世界の思想が集まりそれを所有している点で「外に比類なき濃き流れ」なのだ。したがって、「最も東西の思想を折衷して円満の調和」を成就しうるのは「我が大日本国」を措いてほかにない。そして逍遙は、「二大思潮を調和して一大思潮となし」、それを文学界に反映すれば、「未来に於ける世界的文明の指導者」として日本が立つ日が到来する可能性さえある、とまで述べるのである。

後半は、これも「日本大膨張」下の聴衆の歓心を買う擬態だろうが、ここで「量」が問題にされるのは「普遍」の普遍性に関わっている。つまり、「東洋固有の諸要素」「日本廿六世紀的思潮」に「泰西十九世紀の思想」をも加えた日本はすでに「普遍」を充たし、「普遍平等」の「世界文学」性に裏打ちされた「国民文学」創成の条件を具えているというわけである。

ところで、ここで逍遙が言挙げしている「平等兼差別」は、「美辞論稿」（『早稲田文学』第31～48号、明治二六年一～九月）で語られた「主

観兼客観」の文学観を思潮観に投射したものにほかならない。遡れば、それは「梓神子」（『読売新聞』、明治二四年五月一五日～六月一七日、全十一回）からの逍遙の主張、すなわち文学の理想態としての「没理想」性に通じていく。[注12]「没理想」の文学論（「主観兼客観」の文学論）は、幾多の「理想」を内包することによって「主観」を「客観」に「拡充」していくこと、そうすることで〝平等（人間、通、客、外）と差別（個人、局、主、内）の円満具足〟を「作品」に実現していくこと、つまりは「文学」における「普遍」の表象を「作家」に求めるものだった。

「国文学の将来」第三篇で問題化される「要素の分量の多寡」とは、この逍遙「文学」論にいう、「主観」に内包される「理想」の「量」の「多寡」のことにほかならない。「主観」（＝「自国」＝「日本」）が幾多の「理想」（＝世界全思潮を構成する諸「要素」＝「東洋固有の諸要素」「日本廿六世紀的思潮」「泰西十九世紀の思想」）を内包して「客観」（＝「全世界」）に「拡充」される時、「文学」は「円満の調和」の「普遍平等」を成就する、というわけである。逍遙の「国民文学」論は、こうしてその「文学」論と相即する。

「東洋」「日本」「泰西」を「普遍」を構成する「要素」とみなす逍遙の論理は、これを同期の言論のなかに措くことによってその位相を知ることができる。たとえば、井上哲次郎「日本文学の過去及び将来」（明治二八年一月）は、「国民文学」を、「日本固有の思想」に「他の国民の文学を引き入れ」それを「蘊蓄経営」して「自己に特異なる性質を有する」ものとすること、つまり他国の「国民文学」の要素の「同化」「鎔鋳」として構想する。[注13]また、早稲田学派に属する島村抱月「戦争後の国文学」（明治二八年一月）でも、「内、日本国民の天稟の決して人後に落つべきものにあらざるを信じて畏避逡巡の陋習を脱するとともに、外、欧の英を咀ひ、米の華を噛み、渾化鎔成して」、「別に世界に誇るべき日本固有の文学」を「創設」することが主張される。「同化」「鎔鋳」「渾化」「鎔成」をキー・ワードとするこれらの言論が逍遙のそれと決定的に異なるのは、前提としての「日本国民の天稟」、井上のいわゆる「日本固有の思想」（『古事記』に証左を求めての「想像雄偉」「気象快活」「理想純潔」[注14]）が「信」じられている点である。国粋保存主義の、[注15]そして国家的自我のディスクール。逍遙にはそれがない（それ故、逍遙の「未来に於ける世界的文明の指導者」云々の論調はナショナリスト言説の模倣、擬態ということになる）。

明治三〇年一一月の「時代精神の統一を論ず」（『太陽』）で、「所謂世界主義の極端に走らず、所謂国家主義の固陋に陥らず、国民性情の特質及び其の発達の理想を自覚して世界人文の我れに及ぼす勢力を商量し、其の生存及び進歩に必要なる条件を以て中正なる国家主義」に立つと説くに到る高山樗牛が逍遙の議論と無縁なのはいうまでもない。[注16]しかしまた、樗牛に「足下の論は経世家の言議としては遂に無意味の愚論なり」[注17]と批判された内村鑑三も、逍遙とは重ならない。明治二七年一〇月政教社刊の志賀重昂『日本風景論』への書評（『六合雑誌』、同年一二月）で「我国の風景」に「酔」う論述を難じ、「愛国心上騰の今日に方て此非国家的の言を発する批評家の任亦難かな」と自らの立場を表明する内村は、たしかに逍遙に近い。けれども、明治二五年四月「日本国の天職」（『六合雑誌』、初出は同年二月の英字新聞『ジャパン・メイル』に掲載の“Japan:Its Mission”）で「東西両洋

の仲裁人」、明治二七年九月「日清戦争の義」（『国民文学』、初出は同誌八月号の“Justification of The Corean War”）で「東洋に於ける進歩主義の戦士」と日本を位置づける内村は、逍遙から遠い。明治二八年七月「何故に大文学は出でざる乎」（『国民之友』）で「個人的精神の上に、国民的精神の上に、世界的精神なるものありて、之を吸収し、之を消化し、之を形成して世界的文学は出る」として「大文学」を構想する内村は、同年一〇月「如何にして大文学を得ん乎」（『国民之友』）では「国人悉く誠実を尚び、品性は文に優りて尊敬さるゝに及んで、始て世界を風靡する大文学は吾人の中より望むべきなり」と語って「普遍」ならぬ「誠実」「品性」への志向を求め、「世界」の「風靡」を想う。そして、明治三〇年七月発行の翻訳詩集『愛吟』に「宇宙的な祖国愛」を謳うホイットマンへの親近をしめしては、明治四二年一月の「詩人ワルト　ホヰットマン」（『櫟林集』所収）で「宇宙的なる彼は自己のために自国を愛しなかった。又国のために国を愛しなかった、世界のために、人類のために、万物発展のために、宇宙進行のために彼は彼の北米合衆国を愛した」と述べることになる。[注18] これも両者の距離を窺わせるものだろう。逍遙には内村にある「愛」がない。

自らの「文学」観にそくして自国「国粋」への「信」と「愛」を語らない逍遙、これも彼の「国民文学」論の位相を測るメルク・マールである。

6　おわりに—逍遙のメッセージ

以上、「（演説の体に倣ふ）」を国家的自我（ナショナリズム）言説への擬態と見なして、逍遙が戯態の所作をもって「国文学の将来」に織り込んだ「国民文学」論を析出した。「主観」（＝「自国」）を「客観」（＝「全世界」）に「拡充」して「世界文学」性（＝「普遍」）に裏打ちされた「国民文学」（＝「差別」）を創成すべきこと、それが逍遙の主張である。

逍遙は、この「国民文学」創成の条件、すなわち「主観」の「客観」への「拡充」について、見たように、「東洋固有の諸要素」「日本廿六世紀的思潮」「泰西十九世紀の思想」の内包においてすでに実現しているという。しかし、これは例の歓心を買う擬態だろう。なぜなら、その直後に「読者諸君よ、いまだ軽々しく満足する勿れ。」として「我が現時の思潮ハ、濃厚なるが為に混濁をまぬかれず、すなはち濁りたる思潮也。東洋の思潮と泰西の思潮とが、已に合流せることはハ事実なれども、二者尚相激しつゝあるなり、調和の必要ハ認められながらも調和の実ハいまだ挙がらざるなり。」と述べ、つづけて「水先案内ハ声を揃へて、彼岸々々とよばふと雖も、舟子等互ひに相争ひ、船これが為に進まざるの概あり。」として、自説（＝「水先案内」）に応じず「主観兼客観」「平等兼差別」以前の甲論乙駁に終始する言論界（＝「舟子等」）への苛立ちを洩らしてもいるからである。そして「国民文学」の創成は「将来」に託される。「国文学の将来」と題されたのはこれによる。

興味深いのは、こうした苛立ちもまた「明治精神の中枢」を生きた逍遙の必然だったことである。そもそも「世界文学」たりうる「国民文学」の必要を語る、その議論自体がゲーテ以来の「世界文学」論に由来し、「西洋文明のすぐれた部分に学びながら日本人の文化とその意義を世界にむかって主張しうるものにしようとした」営みだった。ゲーテの「世界文学」は、その晩年（一八二五年以降）、「人類の共通問題を関心事とする普遍的な人間性が存在する」との認識から、「国民文学」に対立する概念として見いだされた。[注19] 逍遙はこうした動向を「泰西今日の思想」と見て「平等兼差別」を説くわけだが、依然として国家的自我に傾いて「国民文学」を、「世界文学」を語る明治日本の論壇に苛立っているのである。

もちろん、「世界文学」論がナショナリズム言説の一斑である以上、苛立つ逍遙もまたそこから解放されているわけではない。「普遍主義が特殊主義へと大きく屈折し、ついには反転していく点にこそ、ナショナリズムの謎の核心がある」と論ずるのは大澤真幸氏だが、[注20] 「主観」（＝「特殊」）の「客観」（＝「普遍」）への「拡充」を唱える逍遙は、まさしく「ナショナリズムの謎」に触れている。しかし、判定の甘さを承知で言えば、国家的自我の呪縛から身をかわし、「東洋固有の諸要素」「日本廿六世紀的思潮」「泰西十九世紀の思想」のすべてを「普遍」の普遍性に送り込む逍遙は、あやうく帝国主義、もしくは植民地主義的なナショナリズムからまぬかれ、「反転」の一歩手前に踏みとどまっているのではなかろうか。

鈴木貞美氏は、トランスナショナル人文学の可能性について次のように述べている。[注21]

いわゆる東洋の伝統的宗教や思想の働きを（…中略…）西洋の宗教とともに、あるいは自然科学や唯物論哲学の働きなどとともに、横並びにして見渡しうる立場を築くこと。ここに、トランスナショナル人文学が、これまでのどんな研究態度もなしえなかった研究を進展させうる大きな可能性がひらけるだろう。この立場を比較的容易に立ちうるのは、おそらく東アジアの人文諸学の研究者たちが筆頭で、次にヨーロッパにおいて西欧中心主義から脱しようと努力している研究者たちだろう。

これはそのまま逍遙の立ち位置、発話に重なっている。あるいは、「泰西十九世紀」を視野に収めつつ「明治精神の中枢」を生きた逍遙を思えば、亀井俊介氏が「真にネイションの運命に責任をもとうとするナショナリズム文学者に要求されるのは、レラティヴィスト（相対主義者）の視点である。」として解説する、次のような言葉が逍遙の胸中をよく代弁しているのかもしれない。[注22]

責任あるナショナリストは、国内的な諸要素について理想と現実との関係を正確に把握すると同時に、インターナショナルな視点からも、実体にそくした情勢認識をしていかなければならない。つまり、ナショナリズムの「魔力」に酔うことはナショナリズム文学者の出発点であるけれども、彼は同時に醒めていなければ、真にネイションを導く文学者とはなれないと思われる。私の考える理想的なナショナリズム文学者は、こうして見てくると、ロマン主義の精神を持ちながら、すぐれたリアリストでもなければならない、ということになる。

かくして、「国粋」への「信」と「愛」に距離を措く逍遙はレラティ

ヴィストもしくはトランスナショナル人文学の魁である。

しかし、その逍遙は言う。「夫れ言ふは易うして行ふは難し」「読者よ、諸君は諸君の大希望に副ふべき現日本の声ありと信ずるか」、「現日本の理想の影たる大なる文学は絶無也すなはち現日本は声を有せず、無言也、黙然たり、唖の如し、死せるが如し。偶々聴くに足るの声あるを聴けば、悉く皆過去の声なり、過去の日本の記せる声なり」[注23]、「現在の国文壇に絶望したる吾人は、切に将来の国文壇に向かひて、幾層の奮励を望まざるを得ず」[注24]、と。

声を持たない明治二八年の明治。そこに文化植民地下のサバルタンの姿[注25]をも指摘したい誘惑に駆られるが、それはともかく、こうして逍遙は過去への退路をも断ちつつ「世界文学」たりうる「国民文学」の現時不在、不能を嘆き、その具体的な像をも示さないまま筆を擱く。

けれども、逍遙にそのヴィジョンを示す発言がなかったわけではない。明治二四年の「梓神子」はその一つ[注26]。明治二八年にも「歴史小説」の在り方をめぐって次のように語っている[注27]。

我々の欲する所は、過去の理想及び感想と其の理想及感想が造化天道と相因縁果報するの形跡なり。為朝を見んと欲するにあらず。義経を見んと欲するにあらず。這は欲すとも能ふまじきこと也。我々の望みはせめても源平時代を見んと欲する也。否過去の人間と天道とが関係因果せし面影を、髣髴（ほのか）にだに知らんとする也。彼の風俗や言語や事実や、此等は皆此の複雑なる因果史を探知せん為の資料のみ、若しくは括現せん為の方便のみ。所謂歴史小説の主脳にはあらず。（句読点、引用者）

また、逍遙宅に寄寓して『早稲田文学』の編集に携わった綱島梁川は、「吾人は国民性を描けとの一語に与みする能はず、何となればそは殆ど無意義に類すれば也」と結論する「国民性と文学」（『早稲田文学』八、明治三一年五月）において、次のように逍遙の議論の核心を代弁している。

（引用者補、「国民性を唱ふる一派の正意」は「国民の美処もしくは美なる特質を描けとの義」であろうが）むしろ美醜両面を併写せる真個の「我」を描写したる底の作物にこそ甚深の満足を感ずべきにはあらざるか、（…中略…）仮りに国民としての意識の満足を此に見るを得ずとせんも、若し件の作にして或不易なる人生の消息を描きたるの側ありとせば、吾人は之れに一種幽奥なる性情の満足を感ぜざるべきか。

さらに、逍遙は、「国文学の将来」では「「現日本の理想の影たる大なる文学」を求めてあえて古典を退けたが[注28]、明治二七年一一月「読書法を説きて国文研究者に望む」（『國學院雑誌』第一号）においては「現未来三世に亘るべき大いなる真理」（＝「普遍」）をめぐる思索の場として古典の「読書」を位置づけ[注29]、次のように説いている。

・普く和漢の名著を読破し、これに対照するに、泰西古今の編著述作を以てし、かれに通貫せるところを此れに浸徹せる所とを比較し、周細精到に論評し、或は有形無形の事実に徴し、或は最新学理に拠り、所謂人生とは如何なる深義を含めるか、所謂大道とは何をかいへる、善く人間を統御する大勢力とは何ぞ、天とは何ぞ、命とは何ぞ、と、例へば古今の大哲学者が演繹帰納して論断すらんが如く、過現未来三世に亘るべき大いなる真

理を発揮したりとせばいかに。これ皆高尚なる読書法より得らるべき結果なり。

・総じて古文学を研究するは、現在及び未来の鑑とせんためなれば、書は決して死物、死記録として読むべからず。過去の活ける事実の記録、我が祖先同胞が心の歴史、人の思想感情の如何に変遷しゆくかといふことを示す鑑、吾人が未然の進歩、未来の発達の必須なる階梯として読むべきなり。

そして、明治三二年四月「文学研究法（講話筆記）」[注30]においても、「文学」の主意は「普通の実際に於て見えない心の苦しみを生けるが如く現前に浮いて出る様に見せる」ことにあるとして、その批評解釈法を以下のように解説している。

一体吾々が文学を研究するのは善いか悪いかと云ふことを判定するよりも自然及び人間の旨味をその書がどの位まで正しく伝へて居るか、此の作者はどの位まで自然を解釈して居るか、人生を解釈して居るか、どの位まで描き得て居るかと云ふことを見るのが主であるから批評と云ふよりは解釈と云ふことを主とすべきである。

「国粋」への「信」と「愛」に距離を措き、「主観」（＝「自国」）を「客観」（＝「全世界」）に「拡充」して「世界文学」性（＝「普遍」）に裏打ちされた「国民文学」（＝「差別」）の創成をめざすレラティヴィストもしくはトランスナショナル人文学者の「文学」観、「読書」観。そこには、「思考力、判断力、表現力等」の学力育成をめざし、「熟考・評価」「批評」へと大きく楫を切りつつある現在の教育への、いくらかのメッセージを聴き取ることもできるように思われる。

注

1　亀井俊介『ナショナリズムの文学―明治の精神の探求』（一九七一・研究社出版。「結び」を加えた新版は一九八七・講談社学術文庫。以下の引用は後者による）。

2　五味渕典嗣「与謝野鉄幹と〈日本〉のフロンティア」脚注18、金子明雄ほか『ディスクールの帝国―明治三〇年代の文化研究』所収、二〇〇〇・新曜社）は、注1亀井俊介氏のいう明治中後半期「ナショナル文学論」の「主なもの」としてここに掲げた論考を挙げている。

3　品田悦一「国民歌集としての『万葉集』」（ハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造された古典』一九九九・新曜社、所収）、同『万葉集の発明』（二〇〇一・新曜社）第二章。

4　引用は、『國學院雑誌』第七～九（明治二八年五～七月）による。引用に際して漢字は現行通用の字体に改めた。なお、以下、第七号分を第一篇、第八号分を第二篇、第九号分を第三篇と略称する。

5　加藤陽子『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』（二〇〇九・朝日出版社）、所引。

6　注1、亀井俊介著書、「三ナショナル文学の探究」「四志賀重昂の国粋保存主義」、参照。

7　落合直文は、征清を「軟弱」に陥っている歌が「雄壮」となる「よき機会」とする一方、人々が「軟弱」を厭うあまりに歌が「疎野」になっていることを問題視してもいる。しかし、「疎野」の原因は素人が歌を読むことによるとして、漢語や俗語を用いた「雄壮」な歌の必要を説き、「おのれは、歌よむ人々の、戦争にか、は

れる歌よまむことを望む」と述べ、「支那征伐の大挙」や「軍歌」を伝統的な和歌の題材にすることによって「雄壮」を表象していこうとする主張を展開している。

8　その概要は注1亀井著書「六膨張的大日本の文学」、参照。

9　注2、五味渕典嗣「与謝野鉄幹と〈日本〉のフロンティア」。

10　同時期、幸田露伴も新聞『国会』の連載で、戦争に便乗する俗悪文学を否定し、時局の流行に流されない文学の絶対性を主張している（「露護精舎漫筆」其三十、明治二七年一〇月）。

11　注1、亀井俊介著書「結び」。

12　岡本絵里「坪内逍遙「梓神子」を読む—明治二〇年代初頭の「古典」」（二〇一〇・『論叢　国語教育学』）、参照。

13　井上哲次郎のいう「同化」「鎔鋳」は、外国思想の受容によっても感化されることなく生き続いた「日本固有の思想」を土台にして、よりよい「純一無雑の国文学」、「国民精神」を創り上げていくことである。そして、その文脈で、「文学は此に至らざれば（引用者補、「自家本来の主義を根拠」にしなければ）世界文学中に於て未だ何等の価値をも有せざるなり」と、「国民文学」の「世界文学」化が語られている。

14　こうした井上の所論に対して、内田魯庵は「我等は不幸にして『古事記』を以て世界最古の奇書とする井上博士の説に雷同する能はず。仮に一歩を譲りて此の説を是認するも一『古事記』あるが為に日本文学に価値を加ふると云ふを得ざるなり」と述べ、「古事記』を安易に「世界文学」化しようとする井上に皮肉めいた視線を向けている（「戦後の文学（国民をして機運に乗ぜしめよ）」）。

15　志賀重昂「『日本人』が懐抱する処の旨義を告白す」（『日本人』第二号、明治二一年四月一八日）は、「国粋」を「日本国土に存在する万般なる囲外物の感化と、化学的反応とに適応順従し、以て胚胎し生産し、成長し発達したるものして、且つや大和民族の間に千古万古より遺伝し来り、終に当代に致るまで保存しけるもの」「泰西の開化を輸入し来るも、日本国粋なる胃官を以て之を咀嚼し之を消化し、日本なる身体に同化せしめんとする者」とする。井上哲次郎らの「国粋」もほぼこれに対応する。注1、亀井著書「四志賀重昂の国粋保存主義」、参照。

16　高山樗牛による逍遙批判に「小説革新の時機（非国民的小説を難ず」（『太陽』、明治三一年三月）がある。そこでは、「非国民小説」の源流として逍遙の『小説神髄』があげられ、樗牛のいう「国民文学」に描かれるべき「国民精神」の内容が細かに指定されている。

17　高山樗牛「内村鑑三君に与ふ」（『太陽』、明治三一年一一月）。

18　注1、亀井俊介著書「六膨張的大日本の文学」、参照。

19　長谷川泉「世界文学」（『文芸用語の基礎知識』85四訂増補版、一九八五・至文堂）。

20　大澤真幸『ナショナリズムの由来』（二〇〇七・講談社）。

21　鈴木貞美「トランスナショナル人文学のために—東アジア近代における概念編成の特殊性」（www.nichibun.ac.jp/~sadami/what's%20new/2010/transnationalfinal.final.pdf）

22　注1、亀井俊介著書「序　ナショナリズム文学の問題」。

23　内村鑑三も「如何にして大文学を得ん乎」のなかで、文学の現

況を「言語の下痢症、実行の糞づまり」といっているが、これは当時主流の「朦朧派流の美辞麗句の尊重や硯友社流の趣味的文学観」について言ったもので、逍遙の嘆きとは次元を異にしている。

注1、亀井著書「六膨張的大日本の文学」、参照。

24　逍遙は明治二七年七月の「まづ我が国の四大作家を棄却すべし」（筆名「丁々子」、『早稲田大学』第68号）においても、「我が国の物語作者のうち、絶群の誉れある者は、紫式部と近松門左衛門と井原西鶴と曲亭馬琴との四家」としつつも、「四作家をして極致」とするのではなく、「絶対的に円満なるもの」に「理想」を近づけるため、「我が理想の世と共に改心すべきものたるを悟り、尠くとも此の四大作家以外に理想的作家を建設するにあらずは、我が当来の文学は決して祝賀に足らざるものならん」と述べている。

25　スピヴァック『サバルタンは語ることができるか』（一九八八。邦訳は一九九八・みすず書房）。なお、注20大澤著書、参照。

26　注12、岡本論文、参照。

27　坪内逍遙「歴史小説の尊厳」（『読売新聞』、明治二八年一〇月）。引用は、明治文学全集16『坪内逍遙集』（一九八四・筑摩書房）。

28　逍遙は、明治二八年「第二の反動」（坪内雄蔵『文学その折々』、明治二九年・春陽堂、所収）において次のように述べている。

　吾人が古文学、古文法の復興を歓迎せしは、文学をして奈良、平安、若しくは元禄に復らしめんが為にあらず、乱後のほったて文学を一掃して地ならしをなし、新に大国文学を建設せんが為なりしのみ。暫く過去の文学を講習せしは、地盤を平にし、基礎を固うせんが為なりしのみ。然るに世の騒人、いつしか古文学に見せられて、暫く地ならしを終へたる今、新大伽藍を建立せんとはせずして、却つて大極殿の摸造にのみ従事す。嗚呼何の心ぞや。

　なお、北村透谷も「国民と思想」（『評論』八、明治二六年一月。近代日本思想体系31『明治思想集Ⅱ』〈一九七七・筑摩書房〉所収）において、「外来の勢力」（「西洋的思想」）と「過去の勢力（東洋的趣味）」は「今日に於て過ぐるを見る」とし、「思想界発達」の「一九世紀の世界に立って」今最も欠いているものが「創造的勢力」であると語っていた。

29　逍遙の「没理想」論は、特に近松の世話物に着目する中で深化させられてきたものである。逍遙は明治二三年に着手していた近松の世話物研究の一つである「評釈天の網島」を明治二八年一月の『早稲田文学』に掲載しているが、これも逍遙における古典の位置を伝えるものであろう。

30　『文芸と教育』（明治三五年・春陽堂）、所収。

（広島大学大学院博士課程前期二年）
（広島大学）